

- , 1985 a: 最近300年間の火山爆発と異常気象・大凶作, 天気, 32, 157-165.
- , 1985 b: 東北地方に大飢きんをもたらした天保年間の異常冷夏, 天気, 32, 241-248.
- , 1985 c: 最近150年間の東北地方における米収量(作況指数)と夏の平均気温との関係, 天気, 32, 633-369.
- ・山崎幸雄, 1985: 金華山島の鹿を半減させた1984年1~4月の異常低温と融雪遅延の熱収支解析, 天気, 32, 79-86.
- Lamb, H.H., 1970: Volcanic dust in the atmosphere; with a chronology and assessment of its meteorological significance, Philos. Trans. Roy. Soc., London, Ser. A, 425-533.
- Roosen, R.G., and R.J. Angione Atmospheric transmission and climate: Results from Smi-

- thsonian measurements, Bull. Amer. Meteor. Soc., 65, 950-957.
- Simkin, T., L. Siebert, L. McClelland, D. Bridge, C. Newhall and J.H. Latter, 1981: Volcanoes of the World, Smithsonian Inst., Hutchinson Ross Pub. Co., pp. 232.
- 山元龍三郎, 1984: 気候の変動を診断する, 科学, 54(2), 76-83.
- Yamamoto, R. and M. Hoshiai, 1980: Fluctuations of the northern hemisphere mean surface air temperature during recent 100 years, estimated by optimum interpolation, J. Met. Soc. Japan, 58, 187-193.
- Yamamoto, R., T. Iwashima, Sanga Ngoie Kazadi and M. Hoshiai, 1985: An estimate of climatic noise, J. Met. Soc. Japan, 63, (to be published).



増田善信 著
核の冬
—核戦争と気象異変—

草友出版, B5, 160頁, 1500円

昨年8月NHKテレビが『核戦争後の地球』を放映して“核の冬”の研究が大きな反響を呼び政治・社会問題ともなった。

この本で著者は“核の冬”研究の積極的意義を説く。“核の冬”の名付け親ともいえるカール・セーガン博士自身が、核保有量の閾値として、“核の冬”をおこすかおこさないかのぎりぎりの量、100メガトンを提唱している。アメリカ政府のこの問題への研究費の支出も“核の冬”をおこさない程度の核戦争のシナリオ作りの側面をもっている。このように今の“核の冬”研究は消極的側面が強いので、この著者の主張は一般の人にも、核廃絶運動に対しても強い説得力をもつ。

ヒロシマ、ナガサキの原爆と気象現象の関係からはじめて、ビキニの水爆実験での気象学会の声明書の先見性、微気圧波の発見など「核と気象」の歴史的な研究経過の上に、いまの“核の冬”研究の課題が位置づけられているのがこの本のもうひとつの主張である。このことは“核の冬”の前には数百の第2のヒロシマ・ナガサキ、つまり“地球パーベキュー”が存在することを見落としてはならないと警告する。

被爆40周年の今年、核廃絶へむけて世界的に、「ヒロシマ・ナガサキからのアッピール」賛同署名の運動がひ

ろがっているが、その運動の理論的支柱となればとの著者の願いは、核兵器の恐ろしさは広島・長崎で十分わかっているのに、なぜ核戦争後のことを研究するのか?の疑問にもこたえるものである。

I章では、ヒロシマ、ナガサキの原爆と気象、特に、火災旋風と豪雨について記され、調査に当たった先人の苦勞も明らかにされている。

II章では、ビキニ水爆実験について、気象学会の声明の全文が記載され、水爆実験と異常天候についての新しい研究も紹介されている。

III章 核戦争の気象への影響では、「反温室効果」の説明は次章への前段として欠かせないばかりか、「温室効果」と異常天候の関係が社会的にかなり普及しているので、読者に訴える力も大きいだろう。

IV章 全面核戦争と“核の冬”では、この本の中心的な部分だが、大気シュミレーションの結果が文献的にも豊富に引用され、それぞれ適切な解説がつけられている。

V章で核兵器廃絶の課題をこれまでの運動の経過をふまえて訴える。

科学者の社会的責任を一貫して主張し、実行してきた著者の会心の仕事であろう。

著者は、昨年気象研究所を退職されたばかりである。退職後多くの先輩研究者らが多方面でユニークな活動が続けておられる。そんな中の1人である著者が、退職後この本にまとめられたような活動をされたことは敬服を通り越して驚きであった。私の卒直な最大の読後感である。(岡林一夫)